



## SHE



ふたりの間は何かもが薄紅の帳に蔽われていた。  
逢うたび、じんと疲れるような心地と淋しさに気が変になりそうだ。  
また、電話が鳴る。  
その電話がかかる時、私は大抵半分眠ったような状態でいた。霞のかかった意識の中に、ベルの音が快く響く。受話器をとると、まるで深い深い海の底から響くような音色で彼の声は私の耳に届くのだ。

「明日、逢わないか」  
小さな沈黙の後、思い切ったように彼はこう言う。そして彼は私を迎えに来る時間と、必ず私が逢う為に着る衣装を指定する。「あの白いワンピースを着て来てくれるね」  
それはいつでも彼が私にと選り買い与えた物だ。初夏むけの木綿のワンピースは、まだ寒そうだけれど私は必ずそれを着ることを約束した。  
ふたりが逢う街は、いつでも全てが淡く優しく夢の如くゆっくりと時間が過ぎていた。そして静かだ。彼は私に穏やかで湧けなものを求めた。泣くことも笑うことも、幽かに揺れるだけのものを。いつも私を現実から遠く離れた処に置き、人と会わせながら、何もない部屋の中に大切に置いておくのだ。上等の服を着せ、何も教えず、常識やマナーでさえ私には教えず、化粧もさせず、高級なレストランでフォークひとつで食事を済ませてしまうような私を望んでいた。  
「高校生の時にね、初めてのデートで映画を観にいった。可憐な王女と若い新聞記者のつかの間の恋の物語だった。最後に王女は自分の正体を明かさないうちに嘘をついた。  
『私がああ角を曲がったら、それから先は見ないで、このまま帰って』とね。恋はね、そんなお伽話のようなものだと思っていたよ。」  
海を見降ろす丘へと抜ける、白い柵で囲まれた墓地を通る時、彼はそう言った。私はその後について歩きながら、白いワンピースの裾が揺れているのを見ていた。ふと彼は立ち止まり、肩越しに私を振り返ると目を細め「夢のようだ。夢であってほしい。確かに目の前にあった現実が、ふいに消える悲しみにもう一度耐えられそうにない」  
そう言って彼は私に手を差し出した。彼の側にいき、私はその手をとった。  
そのふたりを静かに、そして冷たく見つめる眼を感じながら・・・  
そして、それが私たちふたりの間に淋しさを挿えつけていることを私は知っている。  
白い柵の向こう、彼の妻が眠っていた。

## MAIL

博多からの便り



前略  
陽春の候、皆様におかれましては益々御健勝かつ御清祥のことと厚く御礼申し上げます。さて、別紙にありますとおり(注・名刺のコピーの同封あり。)私こと多田哲朗は、さる某日をもちましてひとまず東京を離れ、ここ九州は福岡、博多へと赴いた次第であります。しかしながら遠く博多にあっても『ミルクホール』をこよなく愛する気持は何ら全く変わることはございません。また、機会がありましたら立ち寄らせていただくことになるかと存じますが・・・まあ、おそらく早くとも今度の盆休みになるとはおもいますが・・・どうかその節はよろしくお願ひ申し上げます。そしてまた、ホッペを言わせてもらえば、昨年引き続き今年もミルクホールの『THE LAST PARTY』には、這ってでも出たい!! まあ、都合がつけばの話ではありますが・・・  
という訳でまずは大変遅れはせがら、取り急ぎ御通知まで。今後益々の御業進をお祈り申し上げます。ひとまずごあいさつに変えさせていただきます。  
'90-4-23(月) 多田哲朗  
P.S.とりあえず『ミルクホールタイムズ』購読料一年分を同封しましたので、よろしく

☆編集部より  
今月は、特別に多田哲朗君の私信を本人の承諾もなく勝手に掲載いたしました。彼の人物を紹介させていただきますと、彼は大阪市堺市出身で、彼は大阪時代からミルクホールに通って来ています。彼は『渡辺美里』の大ファンでありまして、美里のファンクラブで知りあったペンフレンドにミルクホールの事をきき訪ねてきたそうです。皆さん、知っていますか? 渡辺美里のレコードのなかに『MILK HALLで会いましょう』という曲があるんです。そんな事も多田君はわざわざウォークマンを持参して何も知らないカウンターの皆に教えてくれたのです。その後彼は東京のアパレル関係(彼の説明によると)の会社に就職が決まり、西武線電の宮に引越しました。これでミルクホールにもちょくちょく来られますと喜んでいました。又、彼はどこか旅行へ出掛けると必ずおまんじゅうを持ってきてくれました。彼のおまんじゅうを選ぶ目は確かです。美味しかった。悪い事も少しはありました。彼の癖は名刺をあたり構わず配りまくる事と落書き帳をサインペンで書きまくる事です。ついにミルクホールの落書き帳は多田哲朗専用ノートと化し、十年來続いた伝統あるミルクホールの落書き帳を廃刊に追い込んだのです。色々ありましたが、彼の『博多に、行く事になりました・・・』と肩を落としていた姿が今目に浮かびます。あの最後の日にもまだ名刺ができていない事を悔んでいましたね。遠い博多の空の下で寝返っている多田哲朗君! またフラリと遊びにおいでよ。ミルクホールは、皆、変わりありません。・・・再見!

## INFORMATION

春の余韻をのんきに楽しんでいる間に、どこからともなく梅雨前線が近づいてくる気配がします。今年は、もうすっかり聞き慣れてしまった感のあるエルニーニョの影響で早くから長い梅雨、冷たい夏の長期予報が出されています。私のような夏好きの人には当てて欲しくない予報ですが、ミルクホールでは、そんなうっとうしい季節には特にパーッと景気よく楽しもうという歌で『ミルクホールの夏祭り』を企画しています。第一段は、ミルクホールの蚤の市。骨董あり、古道具あり、古着あり、フルハウス、ミルクホール合同のアンティークフェアです。 7月3日より

夏祭り企画予定  
★LIVE  
ロック音楽  
チェンバロ&フルート他  
ジャズ  
ギター&ベース&ボーカル

☆編集部より  
定期購読のお申込みは、御住所、御名前等を  
62円切手12枚か744円を添えてお知らせください。